

# 現代社会を『関係性』という観点から考える

## ⑪ 血縁あるいは家族について

更生保護官署職員（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

三浦 恵子

更生保護官署で働きながら、薬物依存症回復支援や社会的養護に関わるボランティアの端に繋がらせていただいたり、様々な生きづらさを抱える人々を支える活動に関わることを長年続けていると、「血縁」「家族」というものについて考えさせられる機会がしばしば、いえ非常によくあります。私自身が後述するように家族療法を学生時代から学ぶ機会を得て、家族の見立てや世代間境界などについて特に意識していることも大きな要素だと思われれます。

今回は、「血縁」「家族」について考えてみたいと思います。

### 1. 日本における「血縁」「家族」観

これは地域性もあることだと思いますが、日本社会はまだまだ「血縁」「家族」を重視する傾向があると感じます。たとえば、「介護の社会化」を目指して介護保険が導入されて約20年が経過しても、家庭における介護要員として嫁や娘が期待される場面は少なくないと思います。

私自身も嫁いだ（→この漢字自体にイエとイエの結びつきという雰囲気強く感じられるようにも思うのですが）折に、義母から集落の方に

「これがうちの父ちゃん（要介護状態）のチンチン洗ってくれる嫁だ」

と紹介され、少なからず驚いたことがあります。私が実母や伯母の介護の経験を長く経験していたことは義母は勿論知っていましたし、私も義父の介護に関わることについては結婚前から当然のことだと考えていました。そのことで、義母が安堵していたことも承知していました。ただ、いくら義母が飾らない人柄だとはいえ、言葉が言葉だったので、紹介を受けた相手の方も「それは良かったね～」と返すこともできず、行く先々で微妙な空気が漂っていました。ただ、その場で驚きを表明するほど私も配偶者も子どもではないので、社会的な礼節を保って対応しました。その後、配偶者から「要介護状態の親がいるような家に嫁は来ないと母は思い込んでいたから」と聞いた私は、「私を『嫁ぎ先の条件をあれこれ並べ立てるような人間』と思ってるんかい」

としっかりツッコミは入れたのでした。

ただ、この一件が結婚生活のごく冒頭にあったことで、我々が家族として、この血縁関係の中において夫婦間連合をしっかりと保っていくには、相当な覚悟があると腹を括ったのでした。「嫁いだ以上はもうこの家のもん」という強いメッセージを強く感じましたし、

「嫁いだ以上は実家はないもの」「何事も婚家優先」という義母の意向は態度でも言葉でも強く表明されていたからです。

私は、配偶者の両親に当たる義父母を大切にしたい気持ちは無論ありましたが、そうした気持ちと、世代間境界を曖昧にすることは全く別だと考えていました。同居・別居にかかわらず、世代間境界を無造作に踏み越える・踏み越えることを許すことが、家族としての独立性や営みの在り方にひずみを生じさせる例を多く見てきた所以です。

私事になりますが、大学時代を京都で過ごし、社会福祉学科の学生としての実習等の際には京都府の児童相談所で御世話になりました。ミニューチンの構造論的家族療法が日本でいち早く導入されていた児童相談所でもあり、私はここで家族療法との本格的な出会いのチャンスを得ることになりました。このことが後の職業選択にも大きく影響しましたし、大学を卒業し更生保護官署に奉職した後も様々な形で家族療法の研修やワークショップに参加する機会を得ながら、今も学びを続けています。これは本当に得がたいことであると今も思います。

20代半ばで既にベテランのボランティアスタッフが「薬物依存症者の家族のためのセッション」を手伝い、そこで家族のためのグループ・ファシリテーションの実践を経験し、その後独自にグループを立ち上げ15年以上にわたってそれを運営することができたのも、「家族」「家族支援」について学び続けてきたからだと思っています。

世代間を巡る様々なトラブルの多くは、「だって家族だからあたりまえ」「子どもだから親は何を言ってもいい」「親なんだからこのぐらいの甘えは許してくれるだろう」というスタンスでどんどん世代間境界を踏み越えること、相手側にそれを許すことに端を発して

いると私は考えます。「父ちゃんのチンチン洗ってくれる嫁」と呼ばれた私は、結婚生活の中で義母との軋轢が生じた際には、いわゆる嫁姑問題アルアルで片付けるのではなく、世代間境界や夫婦間連合という家族療法の考え方で解決していこうと考え、配偶者とも認識を共有しながら、日々実践を重ねている毎日です。

## 2. 「家族だからあたりまえ」「血は水よりも濃い」ということは本当か

そもそも「家族」であり続けるには、家族を構成するメンバーにそれぞれの自覚と責任と役割遂行の努力が求められると私は考えています。結婚したから、子どもに恵まれたからといって、自動的に夫婦や親としての役割遂行能力が備わるわけではありません。いわゆる婚活や結婚に関するコマーシャルの醸し出すキラキラした雰囲気接するたびに、私はこうした大切な点がおざなりにされているのではないかという違和感を感じてしまいます。

多くの場合、人は様々な理想や期待を持って「家族」を形成します。まず「結婚」(事実婚含む。)がその最初のパターンでしょう。ただ人にはそれぞれ価値観や考え方、生活習慣があるため、そこを摺り合わせ、ある時は妥協したり折り合いをつけたりして(落としどころを見つけるともいうのですが)、その家族なりの雰囲気や文化が形成されていくのだと思います。

「安らぎの場」としての「家庭」を求め自分はその場の醸成に何の努力もせず不満ばかりを述べたり、結婚前の経済感覚や生活習慣を強引に押し通すことも、それに対して相手にきちんと自分の意見を言わず不満を溜め込むことも(パワーバランスが非常に不均衡でDVが発生しているような状況では無論論外

ですが), 家族としては健全な在り方とはいえないでしょう。

夫婦間のコミュニケーションが大切だと言われるのも、こうした様々な課題を話し合いによって乗り越えていくためです。

かつて、御父様が「そこは夫婦なんだから察して欲しい。」「夫婦ってそんなもんでしょう。ツーカーというか。」と繰り返される御両親と継続的に面接をしていたことがあります。御父様は決して言葉も荒くなくむしろ多弁な方ではありません。ただ、不機嫌になるとそれが表情や雰囲気に出てしまうので、御母様にとっては「怖い」と感じられてしまい、萎縮した御母様は御父様に相談できなくなるという悪循環に陥っていると感じられる状態でした。私は自分と同年代のこの御両親（むしろ御父様の側にだけですが）「ツーカー神話」（と呼ぶべきもの）があることに驚きながら、「ツーカーって・・・(サザエさんの) 波平さんとオフネさんみたいなことを求めておられるのですか。」と返してつつ、「考えておられるなら、はっきり言葉に出された方が、御両親が話し合われるきっかけになるのではないのでしょうか。」とお伝えしたことがあります。

こうした「ツーカー神話」、いわゆる「以心伝心」のようなものは、特に男性側（夫側）にとっては理想なのかもしれませんが、一朝一夕でできるものではなく、長年コミュニケーションを重ねてきた結果の賜物かもしれませんが、妻たるものの当然の心得として求められてきたフシもあると感じます。まさに「夫婦だからあたりまえ」という考えの（一方的な）理想型だと言うのは言いすぎでしょうか。

ただ、「言わなくても察して欲しい。」という感情は男性に限ったこと、もっと言えば夫婦関係に限ったことではありません。家庭以外の社会のあらゆる場面でごく普通に見受けられることですし、目の前の状況を素早く観

察・判断して、「言われる前に動く」ことを求められる場面は多々あります。ただ、職場等では先輩社員・先輩職員からその動きを学ぶ機会がまだありますが、一番小さな社会である家庭においてはそれがありません。仮に(今では少なくなってきましたが) 三世代同居や先に結婚した世代との同居家族であったとしても、その動きをそのまま踏襲すればよいという単純なものではありません。こうした場合に「自分が育ってきた家庭でのやり方・在り方」「自分がして理想とする家庭の在り方」に拘りすぎると、パートナーとなる配偶者との家庭観・家族観とのズレが生じていくことは心しておくべきだと考えます。

「家族だからあたりまえ」「血は水よりも濃い」とも言われてきましたが、果たしてそれは全てにおいて通じるのでしょうか。私は更生保護官署で加害者臨床の仕事に従事してきましたが、「(他人ではなく) 家族だからこそ許せない」という心情に接する場面を数多く体験してきました。非行や犯罪が発生すると、それに対する非難は事件を起こした本人のみならず家族にも及ぶことがあります。大きな事件の場合、メディアスクラムで家族が外出すらままならない自体になることもあります。そうした中で、「家族だから」という理由で本人の更生を支えることが当然だというスタンスで家族に接することや、家族の情愛に過度に訴える働き掛けは望ましくないと私は考えています。特に、血縁者内で発生した重大事件(前回で述べたような配偶者殺人や子殺し、拡大自殺としての心中(未遂))の場合は、当該血縁者は加害者家族でもあり被害者家族でもあるので、その心情は一層辛いものがあることが少なくありません。もちろん個々の事例によって家族の心情には差異がありますが、この点に留意をしておかないと、家族を追い詰めてしまうことになりかねません。

### 3. 「家族だからあたりまえ」の陥穽 (非行・犯罪以外) について

そして「家族だからあたりまえ」ということを前提になされるのが、世代間境界を無造作に踏み越えてしまうことや、敢えてそれを許して過度に父母世代に依存することです。子ども世代の子育てに親世代が過剰に介入することで生じるトラブルは小さなものから取り返しの付かないものまで多く見られるものです。確かに経験豊富な親世代から見れば、子ども世代の子育ては危なっかしく思われる場面もあるかもしれませんが、SOSを求められれば適切な援助をすることは問題がないでしょう。しかし子育ての方法は時代によって異なっています。親世代の子育てを押しつけてしまうことは決して望ましいこととはいえません。また、子ども世代が過剰に親世代に頼ってしまうことは、子ども世代の問題解決能力を育てることにはつながりません。

また、親世代が自分の世代で解決できなかった問題を子ども世代に「家族だからあたりまえ」と丸投げすることで、子ども世代が非常に苦しい思いをすることもあります。

ある御家庭では、親世代が「家族だからあたりまえ」という前提で、自分の子ども世代の生活にどんどん踏み込むことが日常的に起きていました。子ども世代はそれぞれの事情を抱えていましたが、そうしたことはおかまいなしに親世代が「自分の価値観」に基づいて子ども世代の家庭の在り方に踏み込むことが繰り返えされてきました。親世代にとっては「孫」にあたる子どもが早く欲しいという気持ちは理解できなくもありませんが、それをやんわりとほのめかす程度ではなく、例えば「種がないのか畑が悪いのか」という表現を人前でされるのがどれだけ子ども世代を追い詰めているのか親世代には全く理解されていないようでした。

当初私は、ここまで親世代が子ども世代の家庭に介入してくる背景として、子ども世代が親世代に何らかの経済的支援を求めているのかと考えたほどです（下世話な言い方ですが、「金は出すから口も出す」という類いのものです）。ただ、そうしたことはなく、むしろ親世代が子ども世代（最後まで支援の場に踏みとどまっていた子ども世代）に対して金銭的な援助を当然のように求めることが日常的に続いていました。その額は「だって親のためだから当たり前」と求められたバリアフリー住宅を筆頭に数千万円に及び、子ども世代の家計を圧迫していました。子どもは複数いましたが、早々に絶縁状態になっており、絶縁状態になった理由に思い至らない親世代はその子ども世代を悪し様に罵ってトラブルになったり、残った子ども世代にますます介入・依存するという悪循環になり、なんとか親世代の支援の場に踏みとどまった最後の子ども世代もすっかり疲弊していました。私はこの御家庭には業務以外の立場で関わっていましたが、当初は家族間境界がずたずたになっていた状態でした。生育歴なども伺いましたが、全ての子どもが親世代の意向に添うようにコントロールされ、それは暴力の行使や人格的な否定をも厭わない激しさであったことが、絶縁状態となった子ども世代からも、最後までこの親世代を支えている子ども世代からも共通して語られていました。

親世代には介護を必要とする父親がいたということもあり、様々な地域の社会資源が親世代の家庭に入るように環境面の調整を行い、親世代の生活を子ども世代だけで担う状況を改善することがまず急務でした。その上で、子ども世代の側で自らの家庭を守るために家族間境界を明確にすることが勧められました。長年の経緯があり様々な紆余曲折がありました。結果的に最後に残った子ども世

代は、「子ども世代として出来るべきことはしなければいけないとは考えていること。民法上の相対的扶養義務などがそれに該当すること。」「しかし、親世代からの様々な要求が自分たちの家庭を圧迫し、これ以上は子ども世代だけでは支援できないので、社会資源や様々な制度利用を図ったこと。」「親世代の要求について、社会のルール等に相反すると思われるもの、限度を超えるものについては関与できないこと。」を親世代に伝えるに至りました。当然これは親世代の怒りや動揺を招きましたし、それが様々な形で子ども世代への攻撃的言動にも及びましたが、

子ども世代は親世代の泣き落としや議論に巻き込まれることなく、壊れたレコードのように同じ説明を繰り返すことを続けました。最終的には、最後に残った子ども世代が、親世代が独自の価値観で積み残してきた、放置することによって親族や地域社会に多大な迷惑をかけるような多くの課題を淡々と解決し続け、地域社会や親族の方々に対しては丁寧に謝罪をする姿に接した親族や地域社会の方々事情を理解し支えて下さったこともあり、子ども世代は親世代との世代間境界の保持をしたまま、絶縁という極端な方法をとることなく、現在に至っています。

ただ、留意しておかねばいけないのは、一連の過程において、一番ダメージが大きかったのは、親世代から「畑が悪い」「子どもなんて私達親のモノ。嫁なんか人間以下。」とまで言われ、名前ではなく「財布」と呼ばれることすらあった（理系の専門職であり、他の子ども世代の配偶者とは異なり一定の収入があったため、お金を出すことが当然とされていた経緯も多くあった模様です）実子の配偶者（女性）ではなく、実子（男性）の側であったということです。実子の配偶者については、「自分の親から言われればとても情けないし

腹が立っただろう。けれども、結婚によって縁が出来た法律上の家族、つまり「mother in law」（姑という言葉の英訳です。女偏に古いと書くよりも、よほど現実的だと感じました）の言っている言葉だから、衝撃的だったけれども『ああ品がないなあ』とどこかで客観視していた。」という言葉どおり、嫁ぎ先の親世代の言動をかなり客観的に見ていました。そしてその一方で「実の親世代から言われる配偶者の方がもっと辛いだろう。」と考えることができていました。実際に親世代の実子である配偶者が、激しい親世代からの攻撃で過去の負の体験を思い出し体調を崩した時の療養・避難の判断についても迷いがありませんでした。

換言すれば、家族間境界を踏み込まれることを繰り返されつつも、夫婦間連合が辛うじて機能していたため、この子ども世代は、子ども世代自身の家庭が崩壊することなく、また絶縁という他の子ども世代がとった方法を探ることもなく、親世代との境界線を強固にするものができたのではないかと思います。

現代社会における家庭の在り方は様々です。自分の考える家族や血縁の在り方を相手に押しつけることは、相手の領域に土足で踏み込む危険性があるということ、そして、何か不自然な動き（特に物事の決定の在り方など）がある家庭においては、こうした世代間境界の侵犯などが行われている可能性あるということについて、家族に接する全ての対人援助職は認識を持っておくべきだと考えています。